

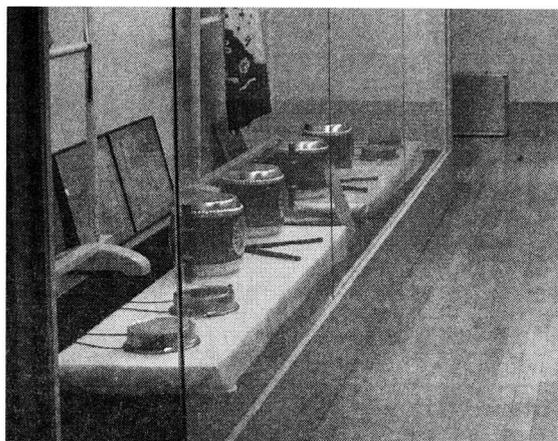
chapter-19

特別曲

焼香太鼓

吉祥院六齋念仏踊り

現行唯一の念仏曲



焼香太鼓（念仏）に使用される太鼓

焼香太鼓（特別曲）



報恩講（年2回春秋）

西教寺（京都市南区吉祥院菅原町）にて

焼香太鼓は、吉祥院六齋念仏踊りでは、現行唯一の念仏曲になります。吉祥院天満宮の六齋奉納とは別に特定の場合にこの曲だけを独立して奉納する特別曲になります。

芸能六齋講が行う六齋念仏であり、顔ぶれも保存会の会員が行います。

奉納先正面に導師（念仏先導役）が位置し、その両脇に鉦方が並び、太鼓方は、その列に垂直に二列対面して立ちます。導師と座（導師以外の者）が掛け合いで念仏曲を唱和し、鉦、太鼓の演奏がそれに加わります。

空也堂の焼香太鼓

吉祥院地域や上鳥羽地域の六齋は、他所よりは早く空也堂に関係をもっていました。空也堂では、天皇崩御の折りに鉢叩きが数10人打つれて般舟院に参り、念仏、法話を唱えるということが行われていました。

その最初は、醍醐天皇崩御の折、空也上人が草履のまま昇殿、焼香したと説くが、文献上では、後光明院崩御の承応3年（1654年）に行ったのが話題となり、「出来齋京土産」や「京雀」に書き留められています。

弘化3年（1846年）に二孝天皇崩御の折には、これに六齋念仏の上鳥羽が参加しており、慶応3年（1867年）の孝明天皇崩御の折は、吉祥院と上鳥羽が参列しています。

焼香太鼓は、特別曲のため、一般に行われることはあまりありませんが、西教寺で毎年春秋に行われる報恩講や、10月13日に六齋会物故者の供養を勤めるならわしがあり、ここで必ず焼香太鼓をあげることになっていました。また、六齋関係者の家に不幸があった場合にも、通夜の席で焼香太鼓を手向けることになっていました。しかし、近時は、焼香太鼓を継承する保存会員も少なく、残念ながら葬式の折の焼香太鼓（念仏）としては現在行われていません。

天下分目の戦い「山崎の合戦」

(1582年6月2日～6月13日)

吉祥院六齋念仏踊りについての由来などの史料はほとんど残されていません。

確実なものとしては、慶応三年の最古の免許状がありますが、江戸時代後期頃にはすでに盛大に行われていたことは確実です。しかしそれがいつまでさかのぼるかは不明ですが、次のような伝説が伝わっています。

天正十年（1582年）、本能寺の変で織田信長を自刃させた明智光秀と、「主君の仇討ち」を大義名分に揚げた羽柴（豊臣）秀吉との天下分け目の戦い、いわゆる豊臣秀吉と明智光秀とかの「山崎の合戦」の時、豊臣秀吉勢の追撃を受けて、吉祥院に逃げて来た明智光秀勢の残党



豊臣秀吉



明智光秀

が討たれて悲惨な最後を遂げ、村人は戦場に棄てられた鉦鼓しょうこを拾って、干菜寺の六齋を模し之を吊たとされています。ここにいう干菜寺が、六齋念仏総本山として地歩を固めたのは、ほぼその時代であり、当時はすでに西国辺に六齋念仏の集団が活動していたことが知られています。それを傍証するものはなにもありませんが、しかし、吉祥院でもいわゆる六齋念仏としてスタートし、それが次第に芸能的六齋に展開したものとみるのが妥当であります。「焼香太鼓」は、その意味で興味深い伝承です。

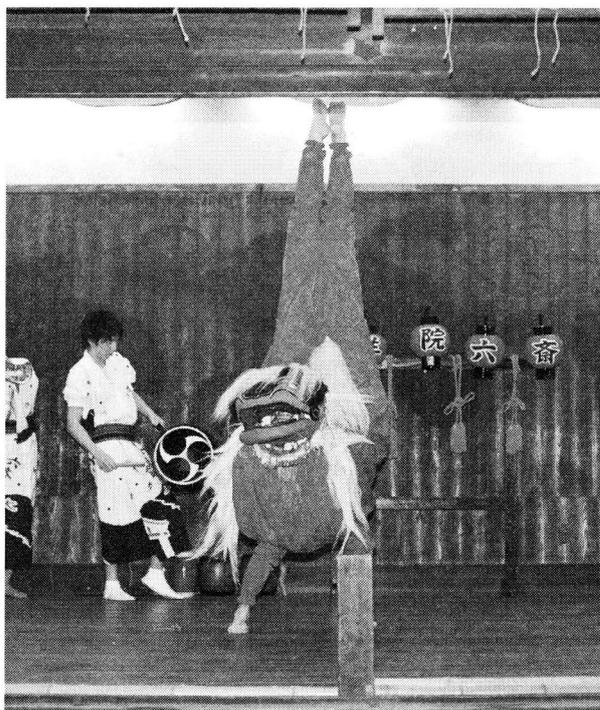
吉祥院の地には過去、一ヶ村各字に一組ずつの六齋講がありました。すなわち東条、西条、北条、南条、石原、新田、中川原、島の八つの団体で、現在はこのうちのたった一つ、南条のみが吉祥院六齋念仏踊りを公演してお



り、別名これを菅原組と呼びます。かつては、25日の奉納は各団体の競演のため26日の朝まで続くこともしばしばであったといえます。

激戦区で培われた腕は確かで、戦後、東京青年会館で行われた「郷土芸能の会」に出演した折には「余りにも上手で素人の農民の娯楽芸能とは思えない。これはプロだ！」と絶賛されました。

昔はしきたりが厳しく、15歳になって入会が認められると、まず「茶番」という下積みを2、3年経験し、稽古を重ね、そうしてやっととりあえず舞台に立つ資格を得られるという、厳しい時代で腕が磨かれました。



獅子の土蜘蛛